



館長だより

山形県産業科学館

令和6年11月28日(木)

発行 館長 加藤智一

スナイパー

11月24日 何気なくネットニュースを見ていたら、面白い動物ネタを発見しました。BuzzFeed Japan_Microsoft に掲載されたその記事は、「スナイパーの語源」。国立科学博物館の「鳥展」で明かされた真相とは？というもの。この話の主演は、一見地味な「タシギ」という鳥。全長27cm。真っ直ぐな長いくちばしをもつジシギ（地鳴）の仲間で、泥地を好み、水田、蓮田、湿地、池沼畔などに棲んでいます。日本では主に冬鳥として本州以南で越冬しているそうです。茶色っぽい体色で地味な姿をしている「タシギ」が話題となったのは、「鳥展」の剥製標本に以下のような解説がつけられていたからでした。

「『焼鳥の王者』と呼ばれるほど美味しく、フランス料理の食材でもある」 「狙撃者を英語でスナイパーと呼ぶが、タシギ (Snipe) を狙って撃つことが語源とされる」



「スナイパー」という言葉は、私達世代で言えば「ゴルゴ13」シリーズを思い浮かべる人は多いと思います。警察や軍隊などで、標的から長距離を隔てて銃などで狙撃を行う人物のことを指しますが、まさか「タシギを撃ち落とせるほどのハンター」という意味だったとは驚きですね。

マーティン・ペグラールさんの著書『ミリタリー・スナイパー/見えざる敵の恐怖』（大日本絵画）では、以下のようにスナイパーの語源について書かれているそうです。それによると「スナイパー」(sniper)という言葉の使用例は、最も早くて18世紀後半、インド駐在のイギリス人武官らが本国に宛てた手紙の中で確認できるそうです。彼らは、勤務の合間におこなう“ラフ・シューティング”すなわち『狩猟地以外での狩猟』のことをより具体的に『スナイプ撃ちに行く』、これを縮めて『スナイピング』に出ると

表現していました。「スナイプ」(snipe)とはチドリやシギ類のこと。特に「タシギ」を指します。小型で敏捷な猟鳥で、全身が黒と茶の斑模様というみごとな保護色。めまぐるしい不規則な飛び方を特徴とし、発見するのが難しいうえ、これを仕留めるのはもっと難しいとされます。「スナイプを撃ち落とせるほどのハンター（スナイパー）であれば、それは並以上の腕前を持つ射撃の名人と評価されました。こうした経緯で射撃の名人を「スナイパー」と呼ぶようになり、第一次大戦の初期に「射撃に秀でた兵」の呼称として報道機関で使うようになったというのが、スナイパーの語源だったそうです。

「タシギ」は渡り鳥です。長いくちばしを特徴に持ちミズズ等を捕まえて器用に食べます。アメリカ北部、アメリカ南部、ユーラシア大陸、アフリカ中部から南部にかけて生息しており、地球のいたるところにいるたくましい鳥です。渡り鳥として冬にはアメリカ中央部、ヨーロッパ南部、アフリカ中東エリア、インドなど暖かい地域へ移動します。日本では、北海道から沖縄へと渡る個体もいるのではと推測されます。自ら快適な気候を求めて移動している賢い鳥なのです。

また、「タシギ」は嘴端開閉（したんかいへい）で、お食事の時間は主に夜なので、夜行性と思いきや、安全なところでは昼間もうろうろするそうなので、半夜行性といったところでしょうか。嘴端開閉とは、「嘴」くちばしの、「端」さきが、「開」開いたり、「閉」閉じたりする様子のことを言います。ちなみに私が所属している男声コーラスグループの名前は、「コール・マイゼン」。マイゼンとは、ドイツ語で「シジュウカラ」を意味するようで、「合唱団に入るのは40歳になってから」と聞かされましたが、私が誘われたのは30代中頃でしたね。年齢ではなくて囀り（歌声）重視ということでよろしくお願ひします。

